

【課題研究報告】

## 子どもの学力を保障する社会科学習評価

(2011年2月20日開催)

加藤 寿朗  
(島根大学)

### 1. 本課題研究のねらい

「思考力・判断力・表現力」の育成など、新学習指導要領の改訂の趣旨をふまえた社会科授業実践が多様に行われている。また文部科学省より示された観点別学習状況の評価の改訂は、社会科の学習指導の在り方を見直す契機とされている。この「学習評価の在り方」についての論議は、評価項目の改訂や評価方法の改善だけを指摘しているのではないであろう。「知識基盤社会」の時代において、「生きる力」を育むために「社会科で育成することが求められる学力とは何か」「そのためにはどのような授業設計が必要か」について問題提起をしていると受け止められる。

このような問題意識の下で、本課題研究では、南浦涼介氏（山口大学）、坂井誠亮氏（北海道教育大学旭川校）、藤本将人氏（北海道教育大学釧路校）の3名の研究者に、「子どもの学力を保障するための社会科学習評価はどうあるべきか」について、具体的な事例に基づきながら提案して頂いた。なお、指定討論者は梅津正美氏（鳴門教育大学）をお願いした。

### 2. 南浦涼介氏の発表：社会科における「評価」から「学習」への視座転換の可能性－「活動と評価の一体化」の視点から－

これまでの社会科の評価研究では、授業理論の「仮説検証」を目的とするアプローチが多かったため、総括的評価の研究が主流となり、その結果「なぜ、子どもができるようになったのか」「なぜ、できなかったか」という学びのプロセスが看過される傾向にあった。一方、授業の中で子どもの認識の様子を把握し、次時の活動に活かすことを重視する形成的評価の研究においても、発話プロトコル分析などでは実践の評価手段として活用が難しいという問題点が指摘されている。本発表は、

社会科授業における子どもの認識の成長を教師が見取るための方法の解明・改善を目的とし、「可視化活動」に焦点を当てながら、山口県のある小学校教師の社会科授業をエスノグラフィック・リサーチの手法を用いて分析・検討した。その結果、授業で生起する子どもの活動への参加と認識の形成、それを把握・評価し、次時の授業調整・改善につなげる教師の評価行為の関係を明らかにした。さらに、形成的評価を可能にする可視化活動の仮説的条件として①表出・外化、②交流・対話・共有、③再内化、④意味・ルールの共有や人間関係の醸成、を抽出した。氏は、教師の教授方法・行為に研究の着眼点を置き、その手がかりとして子どもの学びを見る「評価」研究から、「いかに学んだか」という子どもの学びそのものに着眼点を据えた「学習」研究への転換を主張した。

### 3. 坂井誠亮氏の発表：奈良県小学校社会科診断テストの史的研究により明らかになったことーより良い評価テスト問題を求めてー

坂井氏は、1961年から継続的に実施（50回）されてきた奈良県小学校社会科診断テストの変遷（構造の変容）を問われてきた知識と解答方法から分析し、その結果をもとに子どもの学力を保障するための社会科学習評価について提案した。テスト問題の分析枠組みとして、問われている知識の質については「知識の分類」（岩田一彦）を、解答過程で活用される能力は想起・解釈・問題解決という能力レベル（寺尾健夫）を、地理・歴史・公民領域の内容知と方法知の構造についてはイギリスのナショナルカリキュラム等の構造を用いた。分析の結果、①豊富な資料提示、②選択問題中心の出題、③知識の想起ではなく、資料の解釈とそれに基づいた思考（概念獲得）の重視、④児童の話し合いを想定した意見を選択させる問題の重視、

⑤学習指導要領や教科書改訂への対応，をテスト問題の特徴として整理している。さらに、「関心・意欲・態度」問題やオーセンティック（ストーリー性）な問題という近年の出題傾向の特徴や今後の課題（到達目標の明確化，「思考・判断・表現」の記述問題の開発，児童の実態把握と指導と評価の一体化）にふれながら，社会科の学力の保障とテスト問題開発について述べた。

#### 4. 藤本将人氏の発表：目標準拠評価を実践するためのフレームワークの開発－評価主導の学習指導を実現するために－

藤本氏は，小学校から高校まで目標準拠評価の原理が一貫されるようになったが，「教師の主観的な判断」ではないかという悩みを多くの実践者がもっていることを指摘している。氏はその原因を現実の教室で実践可能な目標準拠評価の授業設計のあり方が具体的に開発されてこなかったことにあるとし，目標準拠評価の実践を支援するフレームワークの開発を行った。オーセンティック・アセスメント論に依拠した授業設計の手続きは，①教師の意図する授業がどのような目標に立ったものであるのかを明示（授業目標分析シート），②目標のどこまで達成できれば，どのような評価結果となるのかを明示（評価基準シート），③目標を達成するための授業がどのようなものかを明示（授業計画シート），④教師の行った授業が目標に沿ったものであったかどうかを，教師と子ども双方で確認（授業改善情報収集シート），⑤子どもが自らの学びをメタ的に認知（自己評価シート）の5つの場面からなり，対応するシートの内容を順に記述することによって目標準拠評価の実践が可能になると主張する。さらにフレームワークの有効性の検証を目的として行った実践研究事例を紹介しながら，成果と課題を示した。開発されたフレームワークは，①評価を手段として授業の目標，内容，方法を教師と子どもが協働して創る，②学習評価のあり方について，教師と子どもが互いに契約する，③評価結果に対する説明責任は教師と子ども双方が担う，という新しい評価観（learning as assessment）に基づくものであった。

#### 5. 指定討論者：梅津正美氏のコメント

梅津氏からまず，本課題研究の主題の捉え方と

して，①社会科教育の固有性から学力，授業，評価のあり方を捉えるのか，一般的な学力を想定してそこから授業や評価を論ずるのか，②到達目標として知識の構造を示し，それに対応する授業に基づいて学習を評価する結果主義，客観主義の立場からの評価論か学習プロセスを重視し，その中で子どもが作りあげたものをていねいに見取る構成主義の立場からのものか，という2つの観点が表示された。その前提に立ちながら3氏の提案に対して，①社会科教育の学習評価論はその教科の固有性の中で論ずるべきかどうか，②形成的評価と総括的評価のバランスや関わりをどう捉えるか，それはなぜか，③子どもの自己評価を積極的に取り入れると子どもには高度な自己評価力が必要となり，また複雑な評価活動を実践現場に求めることにもなるが，そのことの功罪についてどのように考えるか，④プロセス評価に重きを置けば子どもの学習プロセスを見取る教員の高い力量が求められるが，そのような評価力を高めるためにはどのような手立てが考えられるか，といった論点が提示された。

#### 6. まとめ

協議では梅津氏の論点をふまえつつ評価基準の一般化や評価研究を進めていく観点等についての質疑がなされた。本課題研究でなされた討議の内容を以下のようにまとめる。

社会科教育学研究の方法論が多様化しつつある現状をふまえると，評価論を論ずる場合も常に原理論に立ち返る必要がある。それは人が物事をわかるとはどういうことか，社会をわかるとはどういうことかといった認識論から位置づけ直すことであり，そこから授業論や実践を整理し直すことが必要である。ご提案頂いた3氏の発表は，科学主義，客観主義の立場に立ちながら授業論と評価論をつなげていく事例（坂井提案），構成主義の立場から子どもに評価の内容や結果をフィードバックしていく事例（藤本提案），構成主義の立場から実践者の評価行為を意味づけ，見取りの技法を示した事例（南浦提案）として捉えることができる。